

赤道のサルオガセについて

大 賀 二 郎

はじめに

外国の山間部を旅していて、サルオガセやそれとよく似た白髪状の植物を見かけることがある。老令期に達した森林などで、無数に垂れ下がる状況は、一種異様な幽幻の気が漂う。

もともと、サルオガセは、われわれにとって亜高山植物としてのイメージがある。ところが、新・旧熱帯圏でも生存しているものがある、意外な感じがする。また熱帯アメリカ区には、全く別種であるが、サルオガセモドキという形態の類似した種がある。これらの分布や生態に、何か共通性があるのかも知れない。その背景をさぐってみた。

サルオガセ属の分布と生育環境

サルオガセ属 (*Usnea*) は、わが国では、ゆたかなフローラを展開している。国土が亜寒帯から亜熱帯におよび、地形が複雑で、かつ、森林がよく発達しているためである。42種が知られており、分布域は、本州中部を中

心として、全土にわたっている。垂直分布では、ブナ帯や針葉樹林帯が主であるが、なかには、太平洋岸の島嶼にまで分布域を拡げている種もある。

文献によると、わが国を主産地として、樺太、朝鮮、中国大陆、台湾、ヒマラヤあたりの北帯にひろがり、更に局地的であるが、ヨーロッパ、アフリカ、合衆国東部、南米、オセアニアにも分布していることが知られている。

1975年、アンデス山系のマチュピッチェ遺跡を旅したときの断片的な観察であるが、絶壁からウルバンバ河の谷間にオーバーハングした枝梢にサルオガセが付着しているのを見た。その分布域や形態から、*Usnea rubicurda* Stitr でないかとみられる。(写真I参照)

ちなみにマチュピッチェ遺跡は、72°W 14°Sの地点にあり、海拔3500米、アマゾン源流の森林地帯(モンターシャ)で気候不安定、常に濃霧が発生するが、高地にあるため冷涼である。

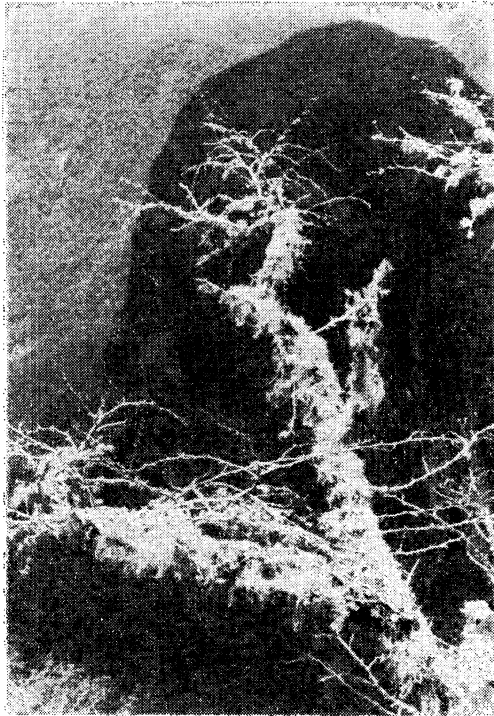


写真 I アンデス山系マチュピッチェ遺跡の岩壁の樹に密生するサルオガセの一種



写真 II 赤道アフリカのンゴロンゴロ火口上の樹に垂下するサルオガセの一種

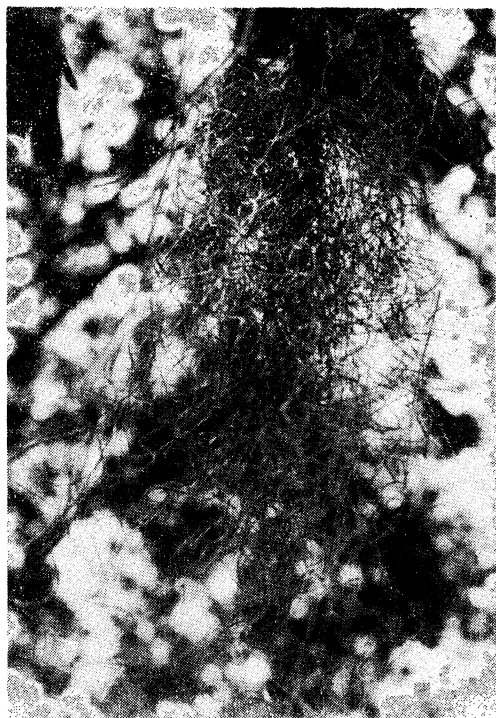
また驚いたことに、1977年、もう一つの大陸赤道アフリカを旅したときにも、ンゴロンゴロ火山口あたりにサルオガセの群落が見られた。霧の通り火山口壁や頂上の小屋の老樹の枝梢にびっしり付着していた。(写真参照Ⅱ)

Usnea baileyi Zahlby でないかとみられる。ちなみにンゴロンゴロ火山口は、35°E 4°Sの地点にあり、海拔2500米、赤道直下であるが、高地で冷霧涼が多い。アフリカ中央高地探検隊などの記録のなかにも、サルオガセの記述がある。タンガニヤ湖東岸は、ルウエンゾリのように赤道下で、白雪をいただく5000米級の座があり、中腹のうっそうとした林中に、おびただしく懸垂する様は神秘そのものであろう。

このようにサルオガセ属は、亜寒帯だけでなく、熱帯の高地にもその適地を見出している。共通種もあるが、多くの種を各地で分枝させている。

サルオガセとサルオガセモドキ

サルオガセモドキ *Tillandsia Usneoides* var. *Filifolia* (写真参照Ⅲ) という外観上サルオガセにきわめて類似した種があることは、注目に価する。Spanish Moss と呼ばれて、フロリダ沼沢地帯の水松の樹幹に付着しているものから、アマゾン源流のあたりまで、その分布域は多様にわたっている。生育環境でもサルオガセとよく似ているが、分類上では、隠花植物と顕花植物という全くのへだたがりがある。



写真Ⅲ サルオガセモドキ(栽培中のもの)

両種を手にとると、構造上判然とした相違がみられる。サルオガセは、基部で着生し、網状でもろい。多くの種は、二支分枝で生長していく。特定の藻と共生関係にあり、母樹に実害を与える。サルオガセモドキは、分枝で母樹にからみつく。髪たば状で、さらっとした感触があり、三支分枝である。共生関係はなく、空気中の水分や窒素を吸収するものとみられ、実害はない。

おわりに

おわりにサルオガセ属は、亜寒帯から熱帯まで、しかも各大陸にわたって分布しているが、かなりセンシティブな植物が、このように領域を拡げているのはなぜか。考えられる要因としては、

- (1) まだ大陸がつながっていたとみられる地質時代から広域に分布していた。
- (2) この属は、光、水分、大気、光量、共生関係、着生基物などに敏感でかなりの選択性があるが、反面、胞子や裂片は、きびしい温度差や乾燥などの環境変化に耐えることができ、それらが風雨などの手段によって、各地に伝播された。
- (3) どの大陸でも、山岳部の気象は、高地冷涼で霧が多いという点で一致する。隔離された地域であっても、独自に分化が行われ、群が形成され、種がその地で固定したと考えることも可能である。

などをあげることができる。

つぎにサルオガセは、どのような系統から分化したのであろうか。サルオガセ属は、殆んどが糸状の地衣体を垂下する形態をとっているが、原型としては、カラタチゴケ、ハナゴケのように灌木状に立生していたのではなからうか。岩壁から樹上に生活圏を占めるようになり、その環境に適応して糸状に移行していったとも考えられる。これは、サルオガセモドキについてもいえる。同種の属するチランジヤは、原型としてはアナナスのようなものが一般的であるが、多様な生態的位置から適応放散が行われ、あるものは、熱帯雨林に分布していたものが、次第に高地に進出し、やがてその地の樹上に生活圏を占めるようになり、環境に適応してサルオガセ状に分化していったものとみられる。

気象、地形などの環境条件と生態的位置が同じであれば、長い変遷のうちに相似のものが造り出される。たとえば、地理的に隔絶された地域であっても、また分類上全くの異種であっても、同じような行程をたどる。その好例といえる。

参考文献

- 吉村 庸 1979 原色日本地衣植物図鑑
小川 房人 1977 熱帯の生態(森林)